地域力創造支援事業 | 事例1

中山市民センター

花と緑のエコタウンづくり

本市では、平成27年度から「地域力創造支援事業」を実施しています。この事業は、町内会をはじめとした地域団体が協働・連携して地域課題の解決に取り組むことを目的とし、市民センターにおいて実施しています。

「もったいない」がきっかけ

「毎年大量に発生する落ち葉を『もったいない』と感じていました。何とか再利用できないかと考えたのが活動のきっかけです」と語るのは、中山市民センターの中川館長。市民センターが位置する中山、川平地区は、祭りや運動会、防災訓練などの様々な行事が活発に行われている地域です。また、地域の公園や街路には、花や緑が豊富にあり、自然に恵まれている反面、雑草や秋に大量に発生する落ち葉の処理が地域の課題となっています。

この地域の共通の課題である雑草や落ち葉に着目し、堆肥化して再利用しながらまちの景観を維持すると同時に、この作業を通じて地域の方々を結びつけ、更に地域の絆を強めることがこの事業のねらいです。

いよいよ活動スタート!

活動を実施するにあたり、市民センターが最初に声を掛けたのは、地域にある公園の清掃など環境美化に力を入れて取り組んでいる中山西第二町内会長の大友さんです。市民センターの想いと、「町内全体を花の散歩道にしたい」と考えた大友さんの想いはつながりました。更に市民センターは、堆肥づくり講座に参加した西勝山町内会長の篠さん、生活環境部長の千葉さんにも声を掛けました。西勝山町内会は、昭和48年に設立された約1,000世帯の大規模な町内会です。安全・安心の町内会を目指し、「仲良く、楽しく、元気良く」をモットーに地域の環境美化にも力を入れていた篠さんも、すぐにこの事業に共感できました。この両町内会を中心として、老人クラブの中山西寿会などにも輪が広がり、落ち葉拾いには、町内会の方々をはじめ、中山小学校や中山中学校の児童や生徒の協力を得ながら「花と緑のエコタウンづくり」がスタートしました。

町内全体を花の散歩道にしたい

（左から）中川館長、千葉生活環境部長、大友会長、篠会長

「声を掛けてもらってよかった」と言われることも

木枠に落ち葉を詰め、足で踏み圧縮

「声掛け」が人の輪をつなぐ

堆肥づくりには場所と時間、そして人が必要です。町内会の方々、児童・生徒たちにより集められた落ち葉を広げ散水し、全体にまんべんなく米ぬかをまいた後、木枠に落ち葉を詰めて、足で踏んで圧縮します。さらに月に1回、圧縮した落ち葉を切り崩しまんべんなく広げ、散水、米ぬかを混合し、再び木枠に詰め、足で踏み圧縮する「切返し」という作業が必要です。水分を含み圧縮された落ち葉はとても重く、重労働となりますが、みんなで冗談を言い合い、笑い合いながら楽しく作業をしています。メンバーの中には、若い世代の方もいて、重労働を伴う作業に欠かせない力となっています。若い世代を巻き込む秘訣は「声掛けにつきます」と篠さんは語ります。篠さんは、体育祭など様々な機会を通して若いお父さん方に、「行事があるから顔だけ出して」と積極的に働きかけています。活動に参加するようになった方から「声を掛けてもらってよかった」と言われることが、篠さんの何よりの喜びとなっています。市民センターから町内会長の大友さんや篠さん、大友さんや篠さんから若いお父さんをはじめとする参加者の方へと、「声掛け」が人の輪をつなげます。

育む地域の絆

秋深まる11月、堆肥でつくった花壇に色とりどりのパンジーが植えられました。花を植える皆さんの顔は生き生きと笑顔に溢れています。「今後、中山西第二町内会や西勝山町内会などの活動を知った他の町内会の方々が、『うちもやりたい』と堆肥づくりに参加してくれれば、この活動の輪が広がっていきます」と中川館長は語ります。中山、川平地区の周辺にも広がっていけば、花と緑を育てる活動を通した地域間の交流もより活発になることでしょう。花と緑を育てる活動により、町内会の皆さんは地域の絆も育てているようでした。

木枠に詰めた落ち葉を切り崩し、まんべんなく広げて米ぬかをまく

堆肥でつくった花壇に色とりどりのパンジーを植える町内会の皆さん

（取材・執筆　市民局地域政策課）

地域力創造支援事業 | 事例2

若林市民センター

みんなでつくる“活気と思いやりのあるまち若林”

本市では、平成27年度から「地域力創造支援事業」を実施しています。この事業は、町内会をはじめとした地域団体が協働・連携して地域課題の解決に取り組むことを目的とし、市民センターにおいて実施しています。

児童を核にしたコミュニティづくり

「次代を担う若林小学校の児童を核に、地域団体などが協働して活動することで、若林を活気と思いやりのあるまちにしたい」と考え、事業を企画した若林市民センター。

若林地区は、ふれあいまつりや運動会など、町内会、小学校、PTAなど各種団体が連携した活動が盛んな地域です。一方、近年は子どもの減少により地域と学校の連携が以前より希薄になってきているのではないか、そのような不安も抱えています。

更に、平成26年、地域内の復興公営住宅に新たな町内会が発足し、もともと地域に住んでいた住民との交流が始まります。市民センターでは、このような地域の状況を踏まえ、小学校の全面的な協力のもと地域の活性化を図る取り組みを開始しました。

小学校の学年事業として交流

「若林地区は、狭い生活道路が多いため地震や火災の際に高齢者が素早く避難することが難しい。防災に対する意識をもっと啓発していきたい。それから、町内会の担い手を確保することも課題となっている」。若林地区町内連合会長の遠藤さんから、このような相談を受けていた市民センター。そこへ、若林小学校のPTA役員の方が「学年行事で目先を変えたことをやりたい」と考えている、という情報が入ります。この二つの情報を結びつけ、地域防災に関する啓発と地域の方と児童の交流を目的とした「親子で防災ゲームin若林」が企画されました。小学校とPTAの協力や遠藤さんの働きかけにより、5年生の児童55名とその保護者22名、地域の町内会や民生委員児童委員会協議会、婦人防火クラブの方々など23名が参加し、児童も大人も防災について学ぶとともに、世代間や地域団体間の交流を深めました。また、参加した保護者に地域へ目を向けてもらうことによって、地域活動の新たな担い手が生まれることにも期待します。

防災に対する意識をもっと啓発していきたい

（左から）
若生館長、
遠藤会長

地域づくりのキーワードは『連携』

「親子で防災ゲームin若林」で活発に意見を交わし、交流を深める

復興公営住宅を花いっぱいにしたい!

「防災ゲームin若林」を通して小学校と強まった連携は、更に続きます。若林西復興公営住宅の住民で組織された町内会、若林西せせらぎ会は、平成26年に128世帯で設立されました。住民の多くは東日本大震災の被害を受け、長く住んでいた土地を離れ新たな土地で新生活を始めています。「1日でも早く地域に親しんでほしい」という願いから企画したのが、周辺の町内会も含めた住民と児童が一緒に花植えし、作業を通して児童と住民、住民同士の交流を深める「復興公営住宅を花いっぱいにする事業」です。児童は最初に花の植え方を教わり、住民と一緒に、復興公営住宅が花に包まれる様子を想像しながらスコップでプランターに花の苗を植えます。プランターを囲みながら、時には、作業の手を止め震災時の体験談に聞き入ります。児童の元気な声と色とりどりの花が、住民に元気を与えます。

「復興公営住宅を花いっぱいにする事業」では、
最初に花の植え方を教わる

人と人のつながり

「地域づくりのキーワードは『連携』。災害時は連携していても、数年たつと連携がなくなってしまいます。日頃から話をしたり、声を掛けることで、顔の見える関係を築いていくことが大切なのです」と、遠藤さんは語ります。遠藤さんは、町内の皆さんに声掛けを積極的に行っており、一言でも声を掛けることで会話が生じ、つながりが生まれると考えています。

「子どもたちにここがふるさとだと思ってもらえれば、地域に残る子どもが増える。そのためには、子どもと地域の大人の交流がとても大切ですし、子どもと触れ合うことで地域にも元気が出る」。市民センターの若生館長の力強い言葉に、遠藤さんも大きくうなずいていました。

（取材・執筆　市民局地域政策課）

地域力創造支援事業 | 事例3

八木山市民センター

八木山今昔物語
～じっくり八木山を学ぼう～

本市では、平成27年度から「地域力創造支援事業」を実施しています。この事業は、町内会をはじめとした地域団体が協働・連携して地域課題の解決に取り組むことを目的とし、市民センターにおいて実施しています。

東西線をきっかけとしたまちづくり

平成27年12月の地下鉄東西線「八木山動物公園駅」の開業、八木山地区とひより台地区を結ぶひより台大橋の開通など、人と車の流れが一変する八木山地区。

昭和40年代を中心に住宅団地として開発されたこの地域は、開発当初からの住民が今も地域の中心として熱心に活動されています。特に八木山南地区は住民の入れ替わりが少なく「地域全体が一斉に高齢化していることが課題」と八木山南連合町内会長の高橋さんは語ります。八木山動物公園や遊園地が開園してからおよそ50年、住宅団地ということもあり、地域には商業施設も含め地域のカンフル剤となるような大規模な開発はありませんでした。東西線開業は地域の方々が自分たちのまちを見つめ直し、活気ある新たなまちづくりを行うための大きなきっかけになります。従来から防災への取り組みや市民センターまつりなど連携して活動を行ってきた八木山連合町内会と八木山南連合町内会、そして東北工業大学など地域内に所在する各団体も、東西線をきっかけとして八木山を活性化させたい想いは共通です。

学生と一緒にまち歩き

両連合町内会と大学の想いをつなぐための手段として考えたのが地域誌づくりと併せた地域のマップづくり。「八木山の歴史や地域資源を見つめ直し、新たなまちづくりに取り組むためには、専門知識を有する大学との連携は不可欠だった」と八木山市民センターの並河館長は語ります。

連合町内会など地域の方々が、まち歩きの仕方やまとめ方について学生と一緒に授業を受けます。指導にあたるのは都市マネジメント学科の森田教授。地域の方々にとっても大学の講義を受けるのは刺激となり、学生にとっても地域の方々と意見交換をするのは大きな学びとなります。

平成27年10月、数回の授業を経て、いよいよ八木山の魅力を探ることを目的とした初めてのまち歩きの実践です。地域ごとにグループを分け、町内会の方の案内で巡ります。参加者はそれぞれ動きやすい服装に身を包み、手には筆記用具を持ち、町内会や飲食店、病院などの方の説明に耳を傾けます。取材した内容は、グループごとに「まち歩きマップ」を作成し、お互いに発表します。このマップや地域誌をもとにして、新しいまちづくりを考え、町内会の新たな担い手の発掘にもつながれば、と並河館長は話します。

（左から）玉田会長、髙橋会長、並河館長

時代の流れにあった地域づくりを進めていきたい

じっくりまちを探索して、八木山の魅力を再発見!

メモを取りながら、説明に耳を傾ける参加者

若い世代の育成

「昼間は学生がいるのに、夜はいません。まちに学生が住んでいないと、地域が活性化していかないのです」と語る高橋さん。また、八木山連合町内会長の玉田さんも、学生が卒業してから地域に残るかどうかが重要だと語ります。

八木山地区全体に高齢化の波が押し寄せており、町内会活動にも大きく影響を及ぼします。今は、高橋さん、玉田さん世代のリーダーシップにより地域全体がまとまり活発に活動していますが、お二人や現在の役員の方々の代わりを担う次の世代、そして更に学生などその次の世代の育成を考える必要があります。

時代の流れにあった地域活動

「町内会の会長や役員を担える次の世代を育てたい」と語る高橋さんは、若い方々が八木山のまちづくりへの関心を深めることを期待しています。そのため、市民センターでは、この事業で作成したマップや地域誌などを活用しながら、町内会の次の世代の方々を巻き込んでいくことを目指しています。「地域活動は流動的です。地下鉄東西線ができることにより、人の流れ・車の流れが変われば、当然、地域活動も変わるでしょう。時代の流れにあった地域づくりを進めていきたいと思っています」と、並河館長は八木山の将来を見据えながら話してくれました。

作成途中のマップ。目的は地図を作ることではなく、まちづくり

（取材・執筆　市民局地域政策課）